

原爆を描き続けた長崎の小学生たち

銭座小学校「平和の絵画」の十九年

写真家
岡本 央

●おかもと・さなか 人間と風土をテーマに、各誌にフットボールタージュを発表。著書に『ないないづくしの里山学校』（家の光協会）など。刊行予定の最新刊に『赤いボタン』『火のトンネル』（いずれも6月20日刊行、大月書店）。

間もなく、広島・長崎への原爆投下から七十八年目の夏が来る。長崎の平和公園から南へ一・五キロに位置する長崎市立銭座せんざ小学校では、一年生から六年生までの全学年が年間を通して取り組む平和学習の中で、歴代の六年生たちが絵画制作を行ってきた。二〇〇四年に「火のトンネル」という題で始まった子どもたちの絵画制作取材してきた写真家が、活動の軌跡を紹介する。

被爆都市の長崎市の小中学校では、夏休み中の八月九日は全校登校日だ。長崎に原爆が投下されたこの日、学校で平和集会が開かれる。

同じ被爆自治体でも平和教育の取り組みには違いが



銭座小では、歴代の6年生が絵画制作に取り組んできた（写真は2007年の作品「火のトンネル」・部分）

ある。広島市はかつて小中学校の半数以上で八月六日を登校日として平和学習が行われていたが、二〇一七年には市の休日条例によって登校日が取りやめになっている。学校教育の現場が大きく揺れ、翌年からは各校の判断で八月六日の平和学習が再開になったことも全国的なニュースとなった。

私が長崎市立銭座小学校の絵画制作に強い関心を抱いたのは、雑誌の記事を目にしたのがきっかけだった。爆心地から一・五キロ地点にあるこの小学校では、二〇〇四年から「火のトンネル」というタイトルで、子どもたちが八月九日の出来事を想像し、絵で表現する活動が行われていた。同校では一年生から六年生まで、全学年で年間を通して、「被爆者を招いて話を聞く」

「学校周辺の被爆遺構を巡る」「見聞きしたことを壁新聞にする」といった平和学習に学年単位で取り組んでいる。その集大成として六年生が向き合う課題が「火のトンネル」だった。

私が初めて銭座小学校を訪れて取材したのは二〇〇九年である。その時には、「火のトンネル」の発案者である馬場務先生は、すでに他校へ移った後だったが、後任の先生によって取り組みは続けられていた。

体育館には模造紙を貼り合わせて作ったキャンバスが広げられていた。横八メートル、縦五メートルの大きなものだった。墨のついた筆を手にした子どもたちは、絵の世界に入り込んでいるかのようだった。

五〇〇人以上を亡くした小学校の原爆の絵画

長崎市内には、戦時中の国民学校として被爆し、児童や教職員に多くの犠牲者を出した小学校が各所に存在する。爆心地から南へ一・五キロに位置する銭座小学校（当時：銭座国民学校）では、爆風で木造校舎が全壊し、その後延焼した火災で全焼した。児童は登校していなかったが、在籍児童八五〇人のうち五〇〇人以